やまたらけ

YAMADARAKE

September
2021

No. 95

石を積むように人から人へ

人から人へ石を積むように

序

下の写真は、かつての大原野集落の様子である。町政40周年を記念して発行された『目で見る　はやかわの風景と歴史』に掲載されているもので、昭和35年（1960）頃のものとされている。玉石がきれいに積み上げられた、傾斜地の農地を象徴する段々畑、そしてそれを支える見事な石垣だ。

段々畑を維持するには、石垣の手入れが欠かせず、場合によっては修復が必要になる場合もある。平らな畑は尊いもの。だから石を積むという技術は、その農地に携わる人であれば誰でもできる、あたり前の技術であったはずである。それも農作業、生産活動そのものが、おろそかにならない範囲で取り掛かるのが基本であって、早く、かつ強いものを築くということまでこなしたことだろう。しかし石を積むという技術だけでなく、準備や共同作業の進め方、道具とその使い方に至るまで、昔の人が試行錯誤して確立させてきた大事な文化が根本から、全国の中山間地域で急速に失われていっている。

今号では、令和元年（2019）度から、一般社団法人『石積み学校』や地元団体と協力して、日本上流文化圏研究所で開催してきている石垣修復ワークショップを取り上げたい。この取り組みを通じて、私たちが何を目指そうとしているのか、単なる懐古の念ではなく、未来志向の意味を、読者とともに考えていきたい。（上原）

石積みを継承する価値

耕作しにくい斜面地に平らな面を築いて、生産性を向上させる（図1）。

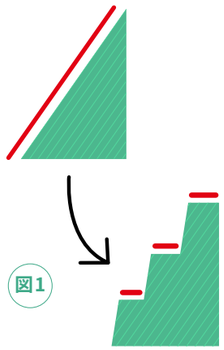


図1

こうやってこしらえた畑が崩れないように、石を積んでしっかり土を留める。斜面地の多い里山や山間地域では、それゆえに農地石垣がごく普通に見られるわけだ。当然、身近にある石が使われる。石の種類によって積み方にも特徴があることから、地域固有の、特徴ある景観が生まれる。早川の谷あいでは、かつては斜面を利用した焼畑（切替畑）が広くおこなわれていたが、家屋周辺のカイト（常畑）では石垣が築かれた。

コンクリートやモルタルといった接着素材を用いない「空石積み」という工法（図2）は、このように地域固有の景観を生み出すばかりでなく、持続可能性の面でも、コンクリート擁壁に比べて次にあげるような大きな利点がある。

❶産業廃棄物を出さない　…石垣が崩れても、積み直しの際には再び材料となる。

❷すぐれた排水機能　…パイプからしか排水しないコンクリート擁壁と違って、全面に排水機能を有する。それゆえ、大雨にも強い。

❸生物多様性を生み出す　…優れた排水性・通気性によって、石垣の内側の土壌と外側の世界は分断されず、積み石どうしの隙間には、虫やヘビ、トカゲなど、様々な生物が生息する。

❹二酸化炭素を排出しない　…コンクリートの製造過程では大量の二酸化炭素が排出されるが、「空石積み」にはそれが全くない。

どれも時代に求められる価値と言えるのではないか。石積みの継承は、こうした価値観を共有していくことにもつながる。

なぜ廃れてしまったのか

石積みに関心を持った人から、「お城の石垣とは違うのですか？」と、よく聞かれる。

強度や構造を維持するための基本的な考え方、石を積む上でのルールはほぼ一緒。明らかな違いは、重視する要素によって表れる。

お城の石積みには「美しさ」や「容姿」が求められる。石と石が隙間なくぴったり合うように、積み石を成型したり、そのために都合の良い石を、別の地域から運んできたりする。それによって足が掛けにくくなり、忍びが登りにくいという機能効果もあるだろう。

しかし農地の石積みでは、冒頭で書いた通り、農作業、生産活動そのものが、おろそかにならない範囲で取り掛かるのが基本である。お城の石垣が専門的な職人技術であるのに対し、農地の石積みというのは〝民芸〟と言った方が適当だ。

こうした大事な〝民芸〟は、どうして廃れてしまったのか。昭和30年代以降、日本農政は「生産力の向上・合理化」、つまり大規模農家を育成する近代化の方向に舵を切る。生産性を上げづらい中山間地域では、高度経済成長による工場労働者の需要と相まって、農業の担い手減少を招いた。

農地の石垣は、図3のように崩壊兆候が見て取れても、しばらくの間、例えば10年くらい崩れ落ちないこともある。また一部が崩れても、全体の生産性が大きく落ち込むこともない。人手不足の中山間地域では石垣修復が先送りされがちで、気づけば修復技術を持った人が高齢者ばかりに。一方で、補助金の対象となるコンクリート擁壁はどんどん増え、若い人には、石垣を直そうという発想すらない場合がほとんどではないだろうか。

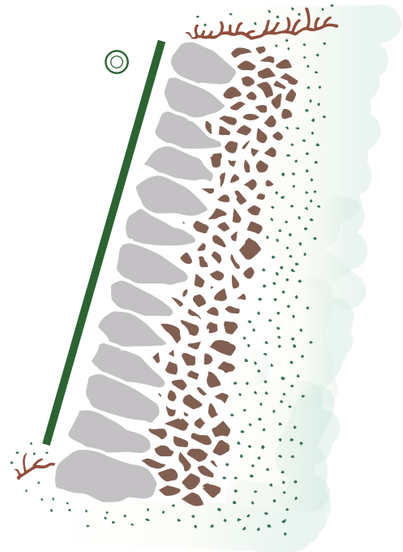
石垣修復ワークショップがもたらすもの

早川町で開催する石垣修復ワークショップにおいて、筆者は講師役も務めている。町内の石垣修復や、町外から講師を依頼されることもある。

きちんとした知識と技術があれば、石垣修復は一人でもできないことはない。けれど、材料を運ぶのも、大きな石を動かすのも、一人でやるのは無駄に大変な思いをすることになる。気の合う友人、石垣が崩れて困るような、利害を共有する近所の人、声のかけやすい後輩らとともに、何人かでやるのが断然良い。早く終わり、疲労も少なく、何より、作業の時間が楽しいものとなる。そして、一緒にやってくれた仲間が自分のところを直したい、と言うならば、手伝いに行ったらいいだろう。

修復の回数が増えれば、それだけ要領も技術も向上する。身の回りの自然資源と地域内でつながる小さな工事で実現するからこそ、技術や文化は人から人へと引き継がれていく。ワークショップは、そのきっかけづくりでもある。

石垣修復ワークショップの展開は、それを通じて〝民芸〟らしい、人間尺度的で、再現性のある、持続可能な社会を目指す、山あいで引き継がれてきた、早川らしい野生を取り戻すための運動なのだ。三年目となる今年からは、早川流域に特徴的な、日本列島誕生にもかかわる地層や岩石（やまだらけ90号を参照）についての学びや、環境教育の観点も取り入れて、より充実したプログラムを実施していきたい。



使用するのは石と土だけ、積み直しの時には、全て材料として再利用する。

図2　空石積み（正しい状態の断面）

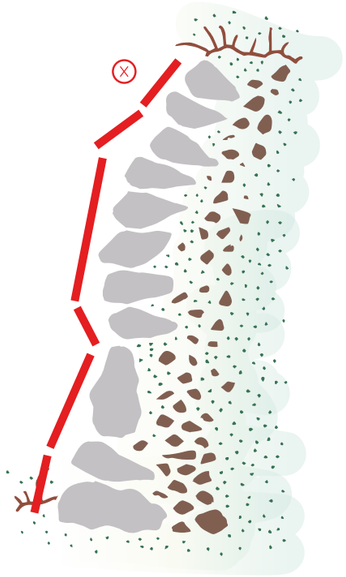


図3　崩れかけた石垣の断面イメージ

人から人へ石を積むように

希望と励ましのエネルギー

ワークショップに参加した人は、作業そのものを通じて、土地のことをよく知ることになる。石垣を直していく過程の中で、その景観は自分が携わったものなのだ、という当事者意識が芽生えてくる。その場所への当事者意識、これは、地域づくりにおいて大きな意味を持つ。それがその土地の人であれば、暮らしの防災にも生きてくるはずだ。

そして石垣が直ると、本当に元気が出る。修復作業中も、近所の人が覗きに来て、思わず手を出したくなるのだろう、場合によっては急きょ作業に加わったりする。風景の復活には、携わっている私自身にもまだ分かっていない、大きな価値があるようだ。それを実感したエピソードがある。

早川町内の早川集落では、かつて、集落の全世帯が参加する、共同味噌造りという地域文化があった。もう途絶えて50年ほどにもなっていたそうだが、それがなんと、上流研で石垣修復ワークショップをはじめたのと同じ年に復活した。

集落共同味噌造りには、集落中から集めた大豆を石釜の上に積み上げて、そこに大きな桶をかぶせて、夜通しで蒸し上げるという花形行事がある。住民と生産量が多い時代には、それを何日も続けたそうだが、長いこと途絶えるあいだに石釜も崩れてしまっていた。そんな中、NPO法人早川エコファームと集落住民が中心になって、何年も前から計画が練られていた集落共同味噌造り復活プロジェクトは、石垣修復ワークショップが早川町内で実現したことによって、この花形行事の再現にも現実味が帯びてくる。「石釜だって自分たちで直せるんじゃないか」と期待が膨らむ。みんなが前向きになり、こちらもワークショップ形式で、あらためて築き上げることができた。

いよいよ蒸し上げ作業の当日、先陣を切って大きな桶を動かす天秤棒の操作を買って出たのは、地元集落と呼ぶ人たちに、こんなことをやってのける度量があるだろうか？風景の復活が有する、計り知れない希望と励ましのエネルギーを垣間見た気がする。

石積みの基本

一般社団法人「石積み学校」を設立した真田さんから「一〝グリ〟、二〝石〟、三に〝積み〟」と習いました。彼女も師匠から聞いた言葉だそうです。つまり、強靭な石垣を築く上で最も大切なのが、ぐり石。次に石の状態、石を積んでいく技術は三番目なのですね。自分の実力を過信せず、自然を尊ぶことの大切さとも通じるような気がします。

石を積む作業で気を付けておくこと

石を上手く積んでいくためには、この３つをおろそかにしてはなりません。

❶ 積み石の荷重が奥に沈むように（図 4）。石垣の擁壁面に対して、積み石の荷重が奥側に傾いていること。

❷ すぐに〝ぐり石〟を入れる（図 5）。積み石の置き方が決まったら、すぐに〝ぐり石〟を入れて固定します。積むのに必死になって後回しにすると、後悔すること間違いなし。

❸ 二つ以上の石に荷重がかかるように石を置く（図 6）。できれば三つの石に接するように置いていくのが理想的。積み石の荷重が左右に分散して安定します。これを心がけて、次の石が置きやすいように積んでいくことも大事。

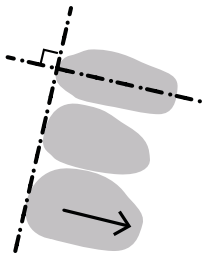


図4 断面図。荷重が奥にかかるように置く

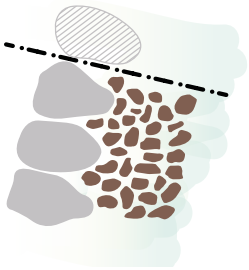


図5 次の石のじゃまにならない高さまでぐり石を入れる

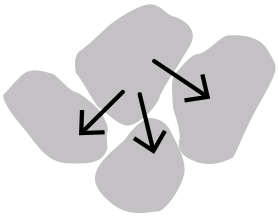


図6 最低二つの石に荷重がかかるように置く

自分で直してみたいという人は

石積みをもっと学びたいという人は、こちらの書籍を参考にするのがオススメ。そのほか、日本上流文化圏研究所や一般社団法人「石積み学校」が開催しているワークショップに参加してみるとよいでしょう。

「図解 誰でもできる石積み入門」

著者　：真田　純子
出版社：一般社団法人
　　農山漁村文化協会

できれば避けたい積み方（禁じ手）（図 7）

次のような積み方をすると、構造的に弱くなってしまいます。先述の３つのルールを守っていればこうはなりませんが、慣れないうちは思いのほかやってしまうものです。図2･3も参考にしながら、身の回りの石垣をチェックしてみてください。

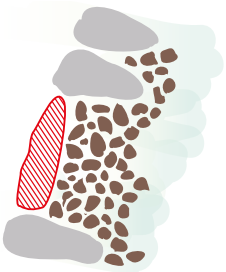


図7-1 たて石

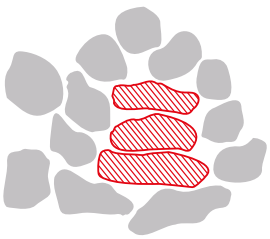


図7-2 ざぶとん、重箱

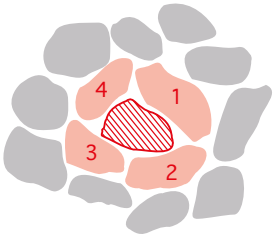


図7-3 四つ巻き

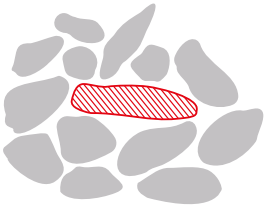


図7-4 真一文字

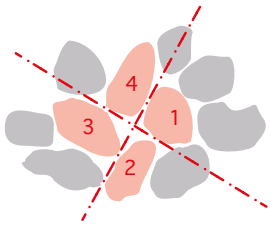


図7-5 十文字

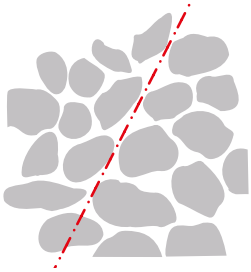


図7-6 目通り

特別企画
鳥の目 虫の目

平成 15 年（2003）に発行を始めた『やまだらけ』。まもなく迎える 100 号の節目まで、上流研のこれまでの取り組みを 6 回に渡り、本誌で振り返っていきます。今回は連載 2 回目です！

その
02

情報誌「やまだらけ」の発行

今回で取り上げるのは情報誌「やまだらけ」。つまり、本誌のこと。

「やまだらけ」は、早川で〝フィールドミュージアム〟を推し進めるためのメディアとして誕生した。〝フィールドミュージアム〟とは、「その土地の歴史・風土・文化そのものを博物館又は美術館に見立て、住んでいる人と訪れた人が互いに価値を発見していく仕組み」として定義される。町外から〝フィールドミュージアム〟推進を支援してもらうために立ち上げた「早川サポーターズクラブ」の会報として、平成 15 年(2003)に発行がはじまった。

「やまだらけ」と合わせて紹介が欠かせないのが「あなたのやる気応援事業」。町民自身によって地域資源を活かした商品開発や起業のアイデアを募り、審査を通った事業に助成することで、地域資源の掘り起こしから保全、継承につなげていくことを目的としている。この助成金のための〝まちづくり基金〟に充てられたのが「早川サポーターズクラブ」の会費である。「あなたのやる気応援事業」で助成を獲得した事業によって地域の魅力を向上させ、交流会、ツアーなどを通じて、サポーターズ会員に還元していく。「やまだらけ」はこの循環構想を実現するための、町民と会員をつなぐ会報であり、また輪を広げるための情報発信メディアであった。

「早川サポーターズクラブ」は、平成 28 年（2016）3 月末をもって解散となったが、「やまだらけ」は発行を続けている。普通の観光では味わえない、早川の深い魅力を伝える情報誌であることを目指し、現在は上流研の正・賛助会員と、町内全戸への配布をおこなっている。これからも早川町民の豊かな暮らしぶりを通して、田舎や山の暮らし、そして早川町への興味関心を持ってもらうための情報源となるべく、町民とともに掘り起こした地域の様々な資源や魅力を余すことなく読者に届けていきたい。

やまだらけ定期購読のお願い

「やまだらけ」の発行は広告料と会員の皆様の会費で成り立っています。会員として、この取り組みを支えてください。

会員の皆様には、「やまだらけ」を毎号お届けいたします。今後も「山の暮らしの価値」と、それを後世に守り伝える人々の活動をお伝えして参ります。

【年会費】正会員：10,000 円
賛助会員：3,000 円

【振込先】ゆうちょ銀行　〇二九店
当座 ０００９５６４４

【名義人】特定非営利活動法人
日本上流文化圏研究所

上流研の取り組みを応援していただいています！

【編集後記】 地域の未来を行政や専門業者に委ね切らずに、僕らの手の中に取り戻そう。土地を守る屈強な石積みも、《民芸》だったと捉え直してみれば、「早川入り」「まんのうがん」「ゆうげぇし」がくんずほぐれつ、素敵な山暮らしを編み出す物語がイメージできる。

山を覗けば宝の山
やまたらけ

発行元／ NPO法人日本上流文化圏研究所
住　所／ 山梨県南巨摩郡早川町薬袋430
t: 0556-45-2160　f: 0556-45-2268
www.joryuken.net